農業への参入事例

～農地所有適格法人で参入～

原料の自社生産で「安心・安全」な製品作り

上原産業有限会社　南九州市：食品製造業

経営概況

・大豆８ha，麦１ha，原料用さつまいも50a　・労働力：常時１人，臨時２人

農業参入の動機･事業展開の特徴

【参入の動機】

さつまいもの澱粉製造を行っていたが，契約農家の平均年齢が高く，将来の原料確保が困難となる恐れがあった。そこで，原料を確保するため，自らさつまいも栽培を開始。味噌や醤油等の製造も行っており，国産原料を確保するため，その一部を自社生産できるよう平成20年に農業生産法人を設立。

【農地の確保及び施設の導入】

・耕作放棄地を探し，農地の所有者を調べて，直接交渉するほか，農業委員会に相談しながら借地面積を増やしていった。（所有する農地のほとんどが借地）
・取引農家や近隣の高齢農家から貸借の依頼があり，次第に規模拡大。

【生産技術の習得，販路の獲得】

１　栽培研修会等に参加し，取引農家からも技術を習得。
２　自らも栽培することで取引農家との信頼関係が構築でき，原料の安定確保につながった。
３　農業機械は中古を探す，作業委託するなどして投資をしすぎないよう工夫。
４　現在，澱粉製造は終了したが，取引農家からの要望もあり，さつまいもの生産及び集荷，苗の生産受託は継続。
５　味噌や醤油等は，県内のスーパーやインターネットでの販売を実施。自社生産の原料を使用したブランド「農之蔵」を立ち上げ，新たな商品展開を実現。

農業参入してよかったこと，今後の展開

○　農業参入の際は販路を確保してから参入した方がよい。
○　農業部門と製造部門で役割分担し，それぞれに専念し，また必要な時は応援にいく。
○　自社の原料となる農産物の生産に取り組むことで，原料の安定確保や製品の付加価値を高められた。
○　高齢農家や離農者の農地を引き受けることで，農地の遊休化を防ぐなどの地域貢献ができた。
○　原料から生産することで，製品に対する愛着と品質の自信につながった。

～農地所有適格法人で参入～

堆肥製造から６次産業化，地域に根ざす企業へ！

クリーンベースちらん株式会社　南九州市：建設業・堆肥製造，販売業

経営概況

・ごま，なたね等　３ｈａ　　・労働力：常時１人

農業参入の動機･事業展開の特徴

【参入の動機】

１　建設業を行っていたが，平成２年から町内で大量に発生する畜産廃棄物の処理事業にも取り組み，堆肥の生産・販売や堆肥撒布の作業受託を実施。

２　従業員の周年雇用と，鶏糞堆肥の利用拡大を図るため，平成19年に「クリーンベースちらん株式会社」を設立し農業参入。

３　堆肥の販売先である金峰ごま生産組合の組合長から，ごま栽培を勧められ，ごまの生産をスタート。

【農地の確保及び施設の導入】

・高齢化により発生した地域の耕作放棄地を解消し規模拡大。
・茶農家との労働力補完やパートの周年雇用，福祉施設からの障害者受け入れ等により労働力を確保。
・平成25年に６次産業化整備事業を活用し搾油施設及び直売所を整備。

【生産技術の習得，販路の獲得】

１　金峰ごま組合の組合員となり研修等に参加し技術を習得。その後，なたねやつばきの生産の他，地域高齢者からつばきの実の買い取りを行う等，地域の資源にも注目しながら拡大。

２　自社で製造した堆肥を使用することで，地域の資源を活用し生産された農産物であることに加え品質や安全性にも繋がっており，付加価値となっている。

３　製品は，スーパーや道の駅での販売のほか，インターネットでも販売し，県内外の顧客を獲得。また，ふるさと納税の返礼品として地域の特産品の一つにもなっている。

農業参入してよかったこと，今後の展開

○　地元の基幹産業である農業に参画して，耕作放棄地の解消や６次産業化の実践，福祉施設の雇用創出等に取り組み，地域活性化に貢献している。

○　会社内での役割分担ができており，支えあってこれたので現在まで続けることができた。今後，農業部門は規模を縮小する予定だが，継続して取り組んでいきたい。

～農地所有適格法人で参入～

堆肥も栽培方法もこだわって，農業を楽しむ！

株式会社エコ・スマイル　霧島市：建設業

経営概況

・水稲・雑穀，露地野菜　　１３ｈａ　　・従業員３人（繁忙期のみ臨時雇用）

農業参入の動機･事業展開の特徴

【参入の動機】

１　子供の病気（アトピー）をきっかけに，食生活の改善に興味を持ち，社長が個人で野菜の有機栽培に取り組む。

２　会社で新たに環境衛生部門を立ち上げ，学校給食等の残渣や廃棄草類等を利用したリサイクル堆肥の製造事業を開始。

３　製造した堆肥を利用して，有機野菜の生産に取り組もうと社内の機運が高まったことから，平成９年に農業生産法人を設立して農業に参入。

【農地の確保】

農地は，知人からの紹介や一部は農業委員会を通して耕作放棄地を借り，自社の所有する重機等で山林を開墾するなどして取得。（現在の作付面積のうち2.0ha は耕作放棄地を再生）

【生産技術の習得】

１　有機農法の技術については，県の普及指導員の支援を受けながら習得した。

２　生産物はすべて有機農法によるものであり，平成13年に有機ＪＡＳ認証を取得。水稲は黒米・赤米など希少価値の高いものを生産。また，穀類，豆類等多くの品目を栽培することで，年間途切れることのない生産体系を確立。

３　学校給食や有機農産物を取り扱う組合との契約栽培が中心であるが，インターネットや地元の直売所による販売も増加。SNSで情報発信も行い，ファンも獲得。

４　製粉機を導入し，小麦粉やそば粉等の加工品販売も開始。

農業参入してよかったこと，今後の展開

○　本業の強みを生かした事業展開ができ，リスク分散にもつながった。農業は軌道に乗るまで時間がかかるため，本業の余力があるうちに参入した方がよい。

○　気象災害等に悩まされるが，農業が好きで楽しいから続けられる。

○　農業をするうえで，地域のつながりはとても大切。地域の住民や農業者と交流を持ち，意見交換できるような付き合いが必要。

○　自社で生産した堆肥は土を育て，品質への自信にもつながっている。家族の健康から始まった取組が，今では地域内外で有機農産物を待っているお客さんがいる。継続していきたい。

～農地所有適格法人で参入～

農業参入からさらに事業拡大！

株式会社オキス　鹿屋市：運送業

経営概況

・露地野菜　30ha，果樹　0.5ha，施設　1ｈa，協力農家（仕入農家）約300ha
・労働力：常時55人

農業参入の動機･事業展開の特徴

【参入の動機】
１　参入18年目。本業の傍ら農業や林業を開始。当初は原料用さつまいもでスタート
２　農産物を出荷するだけは市況の影響が大きく，また運送経費の課題もある。そこで，加工（乾燥）すれば運びやすく，保存期間が長くなる等，より販路を拡大できると考え，加工に取り組むこととなった。
３　地域を元気にするにはボランティアのような無償の活動では限界がある。事業の傍ら，より発展的な地域づくり，地域活性化に取り組みたいと考えた。

【農地の確保及び施設の導入】
原料は自社生産以外に，地域の農家からも買い取っている。野菜はすべて加工し，食品ロス削減に大きく寄与している。

【生産技術の習得，販路の獲得】
１　輸送コストの低減を図るため，野菜の軽量化を目指し，旬の野菜を原料とした「乾燥野菜」の加工事業を始めた。
２　認定農業者となり自社農場と協力農家の拡大で野菜を安定確保。
３　乾燥野菜，だし，お茶等様々な商品を展開。保存の長期化や栄養価を高める効果もあり，より有利な販売につながっている。
４　大隅半島ノウフクコンソーシアムの設立に関わり，近隣の福祉施設とも連携し，農福連携に取り組む。
５　農産物の生産から加工，流通，販売等を一貫して行い，全国・海外に商品を送り届けるビジネスモデルを構築した。

農業参入してよかったこと，今後の展開

○　規格外の農産物を買い取り，商品化することで協力農家の収入アップにつながると共に，６次産業化及び障がい者の雇用創出等，地域活性化の一助となっている。
○　加工場でOEM商品（メーカーが自社ではないブランドの製品を製造すること）の受託も行っており，地域の原料をいかした加工品開発の支援にも取り組んでいる。
○　新たに東京等都心部とのコミュニティを構築し，また大隅の本社でレストランや直売所，キャンプ場等の観光業にも取り組むなど，県外から人を呼び込み，かつ大隅のPRにつながる活動を展開する構想。
○　複数の会社を設立し，新たな農業ビジネスモデルの構築を図りながら関係人口を増やしている。

地域の農家・法人と協力！農福連携の事例

ライズ株式会社　鹿屋市：福祉施設（就労継続支援B型）

経営概況

・キャベツ 5ha，さつまいも 0.5～1ha，ピーマン30a（ハウス），その他野菜 85a
・労働力：常時４人（技能実習生２人）と就労継続支援B型「咲楽工房」の利用者

農業参入の動機･事業展開の特徴

【参入の動機】
障がい者の仕事，工賃確保のために参入。

【農地の確保及びハウスの導入】
・農地は，親戚や農業委員に相談し，福祉施設利用者（以下，利用者）が通いやすい近場の農地からスタート。
・参入して７年目に入り，近隣農家からの交流・理解が得られ，今年から地域で離農するピーマン農家からハウスを使わないかとの相談があり借りることができた。

【生産技術の習得，販路の獲得】
１　平成29年に県が主催の企業参入塾や研修会で情報収集を行い，福祉施設周辺の農業法人（有限会社サンフィールズ，株式会社オキス）へ訪問し，販路を確保。
２　農業法人から出荷先及び施肥設計や品種選定，資材等の技術支援を受けながら農業に取り組んでいる。
３　出荷先の一部は食品製造業であり，納品する作物は難しい選別が不要であり，利用者も安心して選別・出荷作業が行える。
４　利用者が作業しやすい環境のため，福祉施設周辺の農地を確保。農作業のなかで，近隣農家との交流を大事にし，地域農業の担い手として新たに農地も任せられた。
５　大隅半島ノウフクコンソーシアムに所属。農福連携の情報交換や理解を広める活動を行っている。

農業参入してよかったこと，今後の展開

○　農業部門での売上げを確保できている。
○　利用者は農作物を育てる，出荷する喜びを感じていると思う。
○　農業参入の際は販路を確保してから参入した方がよい。また，福祉施設周辺の農業法人の情報収集や力を借りることも重要。
○　大隅半島ノウフクコンソーシアムの「小いもプロジェクト」にも参加。農福連携の理解をより広めていきたい。